

大塚楠緒子

長谷川時雨

青空文庫

もうやがて一一ふたむかし昔に近いまえのことでした。わたしは竹柏ちくはく園えんの御弟子おでしの一人ひとりに、ほんの数えられるばかりに、和歌をまなぶというよりは、『万葉集』『湖月抄』の御講義を聴講にいつておりました。すくなくとも十人、多いときは二、三十人の人たちが、みんな熱心に書籍の中へ書入れたり、手帖ノートへうつされたりしていました。男子も交る時もありましたが、集りは多く女子おんなばかりで、それも年若い美しい方たちが重おもでした。

美しい方たちの寄合うなかでも、何時いつまでも忘れぬ印象をとめているという方は、さてすくないものと、今更に淋さびしい思出のなかに、くつきりと鮮かに初対面の姿の目に残っているのは、大塚おおつか

つかなおこ
楠緒子女史の面影おもかげでした。

やや面おもなが長なお顔だち、ぱつちりと見張った張りのある一重ひとえま瞼ぶち。涼しいのも、爽さわやかなのも、凜りんとしておいでなのもお目ばかり

りではありませんでした。明晰めいせきな声音こわねやものいいにも御氣質があらわれていたのだしように思います。思うこともなげな、才のある若い美しい方ほおの頬ほおの色、生々いきいきとして、はつきりと先生におはなしをなさつてでした。濃い髪おぐしを前髪を大きめにとつて、桃割れには四分ばかりの白のリボンを膝折り結びにかたく結んでかけとお出いででした。二尺の袖そでかと思うほどの長い袖に、淡紅ときいろ色の袖を重ねた右の袂たもとを膝の上にのせて、左の手で振りをしごきながら、目を先生の方を正しくむいてすこし笑ったりなさいました。

帯は高く結んでお出^{いで}でしたが、どんな色合であつたか覚えておりません。忘れたのか、それともその時は、ずっと襖^{ふすま}の側に並んで座^{すわ}っていましたから、其^{そこ}処から見えなかつたのかも知れません。召物^{めしもの}は白^{めしもの}い上布^{かたびら}であらい絣^{がすり}がありました。

その方がその当時、一葉女史を退^のけては花圍女史^{かほ}と並び、薄^{うすら}氷女史より名高く認められていた、楠緒女史^{くすお}とは思ひもよりま

せんでした。自分たちと同じほどの年頃のお方かと思つていましたが、女史は二十一か二の頃でありましたろう。お連^{つれあい}合の博士は海外へ留学なさつてお出のころでした。

四年ばかりたちました。春三月に竹柏^{ちくはく}会の大会が、はじめて日本橋俱樂部^{くらぶ}で催されたおりにはつきりと楠緒女史はあの方だと

思つてお目にかかりました。もうその頃はずつと地味づくりになつて、意気なおつくりで黒ちりめんの五ツ紋もんのお羽織を着てお出でした。女のお子のおありのこともその時に知りました。

その後のちも何かの会のおり、写真を写すおり、御一緒になつて一ひとことふたこと

言二一言おはなししたこともありましたが、私の思出は何時いつも一番お若いときの、袖を撫なでておはなしをなさつていた面影が先立ちます。

容姿かたちも才智ざいも世にすぐれてめでたき人、面影は誰にも美しい思出を残している女史は、数えれば六年前、明治四十三年に三十六歳を年の終りにして、霜しもつき月九日の夕暮に大磯の別荘にて病やまいのためににみまかられてしまいました。

女史には老たるふたおや両親がおありでした。三人の女のお子と、その折に二歳になる男のお子とをお残しでした。今は、二人の女のお子は母君のあとを慕したつて、次々に世をさられました。

女史の遺著は小説、歌文、詩、脚本など沢山にあるなかに、

『晴小袖』は短篇小説をあつめ、『露』は『万朝報』に

連載したのが単行本になりました。『朝日新聞』にて『空だき』

をお書きなすつてから、作風も筆つきも殊ことさら更に調つてきて、

『空だき』の続稿の出るのがまたれました。が、それは女史の胸に描かれただけで、『空だき』が私の読んだものではお別れになつてしまいました。

晩年に女史が私ししゆく淑なされたのは、夏目漱石先生であつたとい

うことを後^{のち}に聞きました。その夏目先生が楠緒さんをお思出しになつたことが最近先生のおかきになつた『硝子戸^{がらすど}の中^{うち}』の一節にありました。無断でそのことを此^{ここ}処へ抜くのは悪いと思ひながら、楠緒女史^{いき}が生^いて見えますので、ほんの影だけでもうつさせて頂^{いた}きたいと、私は大胆にもその事まで此^{ここ}処へ取りいれました。

夏目先生が千駄^{せんだ}木^ぎにお住居^{すまい}であつたところ、ある日夕立の降るなかを、鉄御納戸^{てつおなんど}の八^{はち}間^{けん}の深張^{ふかはり}の傘^{かさ}をさして、人通りのない、土の上のものは洗いながされたような小路を、ぼんやりと歩いていらつしやると、日蔭町^{よせ}というところの寄席^{よせ}の前で一台の幌^{ほろぐる}車^まにお出合なされました。セルロイドの窓が出来ない時分であつたので、先生は遠目にも乗っているのは女だという事にお気が

おつきでした。車の上の人は無心にその白い顔を先生に見せているのが、先生の眼に大変美しく映ったので、凝^{じつ}と見惚^{みと}れていらつしやるうちに、芸者だろうというようなお心が働きかけたそうでした。俤^{くるま}が一間ばかりの前へ来たときに、俤^{いねい}の上の美しい人が鄭^{えしやく}な会釈^{えしやく}をして通りすぎたので、楠緒さんだったということに気がおつきなされたのでした。

その次に先生が楠緒さんにお逢^あいなされたときに、有^{あり}のままをお話しなさる気になって、「実は何処^{どこ}の美しい方かと思つて見ていました。芸者ではないかしらとも考えたのです」と仰^{おつ}しやられたら、楠緒さんは些^{ちつ}とも顔を赭^{あか}らめず、不愉快な表情も見せず、先生のお言葉をただそのままにうけとられたらしかつたと、懐^{なつか}し

いお話しがありました。

夏目先生は、楠緒さんのおなくなりの方に、「あるほどの菊投げ入れよ棺の中」という手向たむけの句をお詠よみになりました。

『硝子戸の中』その章くだりをお読みなされた大塚保治博士は、「漸ようやく

忘れようとする事が出来かけたのに、あれを見てからまた一層
思いだす。」と仰しやっただけです。嘘かまことか知りませんが、
まさむねはくちよう

正宗白鳥さんが角帽生という仮りの名でお書きなされたもの
の中に、大学の文科においてなされた頃の博士と、前東京控訴院
長大塚正男氏の長女の楠緒さんとは、思いあつておむかえなされ
た仲のように書かれてあつたかと覚えております。そうでなくて
も女史ほどの御配偶をお先立てなされたお心持ちは、思出さぬよ

うにとするのが無理な諦めだあきらめたと、お察しすることが出来ます。

明治の文壇に、才媛さいえんの出身者を多くだしたのは麴町こうじまちの富

士見小学だときいております。岡田八千代女史も、国木田治子女

史も富士見小学で学ばれました。楠緒女史もお二人よりは、早く

の出身でした。一ひとつばし橋はしの高等女学校を卒業なされて、博士の留

学のお留守中にも、明治女学校に通いかよ、松野フリイダ嬢に学び英

語を専習されました。ピアノは和歌と同門の友橘糸重女史にたちばない

教えられてお出でした。絵画ははじめ跡見玉枝女史に、後には

橋本雅邦翁に学ばれました。いつでしたかずっと前に、天女てんによ

が花を降らせている画えをある展覧会で見うけたことがありました。

口の悪い評家はかっぱれ天女なんぞと酷評したことがあってから、

公開の席では見る事が出来なくなりました。

多能な女史は料理についても研究なされて、小集会などもよく催されたようでした。

名誉ある学者の夫人、幸福な家庭の女王、作者としては充分な学殖がくしよくと貴き未来たつとをもった、若く美しい楠緒女史は春のころからのわずらいに、夏も越え、秋とすごしても元気よく顔の色もうつくしく、語気も快活いゆに癒いる日を待ちくらし、死ぬ日の五日いつかまえには、

こも籠り居いは松の風さへ嬉しきに心づくしの人の音おとづれ

と竹柏園主佐佐木博士のもとへ葉書をよせられたりなされました。
ぼひよう墓表を書かれた人は、楠緒さんの御婚礼のときに、結納書を書

かかれた人と同じ老人だということを聞いて、
 達方は墓表をながめては嘆かれました。
 葬式ほうむりの日にお友

竹柏園先生は、

ゆく秋の悲しき風は美しきざえある人をさそひいにける
 うつくしきいてふ大樹おおきの夕づく日うるゝ野辺のべに君をはふり
 ぬ

橘糸重女史は、

重きけ気の我身にせまる暗き室へやに、君がためひくかなしびの曲
 胸にそゝぐ涙のひぎき堪たへがたし、暗やみにうもれて君しのぶ時
 心あひの友といふをもはゞかりしかひなき我は世にのこれど
 も

峰百合子女史は、

ゆきあひし駒込道^{こまごめみち}はちかけれどふたゝび君に逢^あふよしのな

き

いたづらに窓の日かげをまもりつゝ、帰らぬ友の行方^{ゆくえ}をぞおもふ

片山広子女史は、

うつくしきものゝすべてをあつめたる其^{その}うつそみは隠ろひしはや

さわやかにいと花やかに笑^えみましゝ、今年の春ぞ別れなりける

書きながすはかなき歌も清^{きよ}らなる御目^{おんめ}に入るをほこりとぞせ

し

千人はゆふべに死にて生るとも二たび来ます君ならめやは

豊島としまのや千本ちもとのいてふ落葉する夕日の森に御供みともするかな

なき世よまで君が心のかゝりけむその幼児をいだきてぞ泣く

掘りかへす新土あらつちの香かも痛ましう夕日にそむき只泣かれける

と嘆きうたわれました。誰たれの胸にも楠緒女史は、美しい面影と思

出を残してゆかれました。まして大塚博士の悲しみはどれ程であ

りましたろう。御自分でも癒なほるとばかり信じていた死の床の枕上

には、紙の白いままのノートが幾冊か重ねられてあつたという事

でした。そういう悲しい思出は数ある樂しかったことよりも深く、

博士が腕かかに抱えて帰京なされた、遺骨の重味おもみと共に終世お忘れに

ならないことでしょう。雑司ぞうしが谷やの御墓おはかの傍かたわらには、和歌うたの友垣ともがき
が植えた、八重山茶花やえさざんかの珍しいほど大輪たいりんの美事みごとな白い花が秋
から冬にかけて咲きます。山茶花はすこし幽ゆうにさびしすぎますが、
白の大輪で八重なのが、ありしお姿をしのばせるかとも思います。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「婦人画報」

1915（大正4）年10月

初出：「婦人画報」

1915（大正4）年10月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大塚楠緒子

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>